

図書館文化講座「能の世界-謡と仕舞-」

6月16日(火)大学2階202号教室(和室)におきまして図書館戸田文化講座が開催されました。

講師は本学助教の浜畑圭吾先生でした。学外からの参加もあり、大変盛況な講座となりました。



皆様のご参加
どうもありがとうございました

次回の戸田文化講座をお知らせします。
皆様お誘いあわせのうえ、どうぞお越しください。

演題：「中門再建について」

講師：高野山宮大工の尾上恵治さん

日時：7月7日(火)16時40分

場所：高野山大学2階205号教室

書道部作品展



図書館閲覧室では現在、書道部の作品を展示しています。

閲覧室の展示は常時展示ではなく定期的に変更していますので、これらの作品を見られるのはこの期間だけです。皆様どうぞご覧になって下さい。

2015年7月開館予定表						
日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

2015年8月開館予定表						
日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

	9:00-20:00		9:00-17:00
	13:00-20:00		休館日
	9:00-19:00		

発行所

〒648-0280

和歌山県伊都郡高野町

高野山385

高野山大学

図書館閲覧室

TEL

0736-56-3835

FAX

0736-56-5590

E-mail

service-lib@koyasan-u.ac.jp

— 説話の森 (4) —

高野山大学教授 図書館長 下西 忠

説話と伝承、伝説、昔話の違いについては、学問的にその違いを明確にしなければならないが、ここではそれを省くことにして、江戸時代の俳文にみえる話しを紹介したい。

小林一茶（1763～1827）の『おらが春』嘉永五年（1852）にみえる話しである。

昔、大和国立田村にむくつけき女ありて、継子の咽を十日ほどほしてより、飯を一椀見せびらかしていふやう、「是をあの石地藏のたべたらんには、汝にもとらせん」とあるに、継子はひだるさたへがたく、石仏の袖にすがりて、しかじかねがひけるに、ふしぎやな、石仏大口あけてむしむし喰ひたまふに、さすがの継母の角もぼつきり折れて、それよりわがうめる子とへだてなくはごくみけるとなん。その地藏菩薩今にありて、折々の供物たえざりけり。

ぼた餅や藪の仏も春の風

大和国に恐ろしい女がいた。継子に十日ほども食べ物を与えない。しかも一椀の飯をみせびらかして「あの地藏が食べたら、お前にもやろう」というのである。継子はひもじさに絶えきれず、地藏の袖にすがって、かくかくしかじかと願った。不思議なことにその地藏が大きな口をあけてむしゃむしゃ食べた。さすがの継母も自分の生んだ子どもと分け隔てをしないで養育したという。その地藏は今にあって、四季折々の供物が絶えないというのである。一茶は不遇の生涯をおくった俳人である。子どもは相次いで夭折し、火災に家も失い、焼け残りの土蔵のなかでその生涯をおえた。一茶は生活の困窮を体験したので、社会の底辺に生きる惨苦な日々をおくる人々の気持ちは理解できた。一茶に、

淋しさに飯をくふなり秋の風

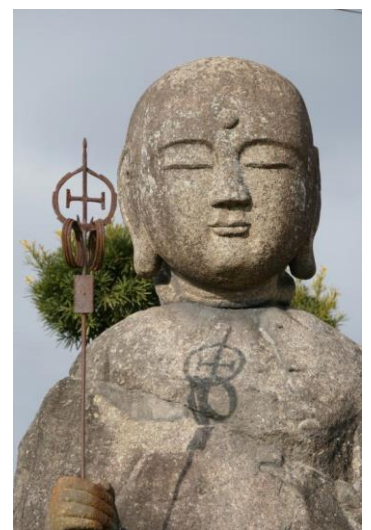
という句がある。孤独で侘びしい生活をする彼にとって、やりきれない寂しさを、飯でも食って紛らわせようとする、その気持ちはいたいほど理解できるであろう。

句意は、藪のなかの地藏にぼた餅が供えられ、春風が気持ちよさそうにそよそよと吹いて、地藏菩薩も気持ちよさそうなことだ、となる。

寒く厳しい冬がすぎて、春さわやかで、あたたかい風が藪の中を通りぬける、その春風は慈悲あふれる地藏の気持ちをあらわしている。子どもを救った地藏菩薩の慈悲は心の底にしみわたる。一茶は地藏に「喰ひたまふ」という敬語を使う。そっと坐す野の仏に対する深い敬愛の念があふれている。

なお、中七「藪の仏も」が、一茶『七番日記』には「地藏のひざも」とある。

この地藏は、大和国斑鳩町五百井に継子地藏とよばれて現存するらしい。法隆寺のそばに今も「日切地藏（継子地藏）」が安置されている。



木津川市山城町の5メートルもある泉橋寺の地藏石仏